

教育を核とする 地域活性化

次世代を担う人材育成と
新たな形のコミュニティ・
プラットフォームの形成



りら創造芸術高等専修学校 校長

山上 範子

教育機関が果たすべき中心的課題として、次世代の社会に活力を生み、さらに発展させていくことのできる人材を育成することが最も重要です。

どのような人材が育てば、次の世代が活性化するのか。

このことに対する一般社会がもつ価値観も混乱、多様化してきているなかで、子どもを育てる保護者にとっては、不安定な社会に対する保険証券のように依然として学力偏重主義が心の多くの部分を占めている事実も否認しません。

反面、「生きる力」を重視する流れの中で、必ずしも学歴にこだわらない人たちが、成長していく過程で、如何に社会の中で活き活きと活動できるかに価値観を求めるようになってきています。

では、その「生きる力」とは何を指すのか。どのような人間像がそのことに当てはまるのか、その答えを求めると、まず第一に自分で考え、自分の意思で行動できるしっかりした主体性が確立され人格として備わっていること。一方で他者との関係を円滑に進めることのできる協調性を併せ持った人間像が浮かんできます。

このような人材が育つためには、学力だけを重視した教育では不十分であり、教養としての学力をしっかりと身につけたうえで、その教養を社会活動で実践的に役立たせ、自己を成長させることのできる人材を教育機関や社会全体で養い、育てていくことが必要だと考えます。

この考えに基づき、さらに私自身の芸術創作活動・教育活動の経験から得た「芸術創作活動が生きる底力を育てる」の確信の基に学校法人を起ち上げ、仲間の方たちと共に教育活動を始めてから7年が経過しようとしています。

その「りら創造芸術学園＝りら創造芸術高等専修学校」では、自然に恵まれた環境の中で、生徒たちは学習や創作活動に没頭しながらのびのびと育ち、大きな夢を抱いて社会に羽ばたいています。

また、学校を大事に思ったださる地域の方々や地域外から学校に関わる活動に参加して下さる方たちが協力するコミュニティが形成されつつあり、学校がそのためのプラットフォームになりつつあります。そして、その働きにより地域そのものも活性化してきています。

「りら」以前 ~ダンスカンパニー設立

私自身の成長過程を振り返れば、幼少期は両親・家族や地域から学び、学童・学生期は学校教育から学び、社会人となって学校での体育教師やダンス指導者としての経験から学び、芸術創作活動から学び、そして現在、一層人の輪が広がり、いろいろな人たちと共に教育活動や地域での活動を行う中で「学び」をいただいています。

人生での最初の転機となったのは、学生時代にダンスに出会ったことで表現や創作の楽しさを知ったことです。思いが募り、ジャズダンスやエアロビクス、フィットネスを指導する仕事に就き、25歳になって、これらのことを指導する団体を設立しました。丁度日本に様々なダンス、フィットネスが広がり日本各地に教室ができた時期でした。仕事として、幼稚園から大学までの各学校での指導や企業からのフィットネス事業の制作の依頼も数多く入って来るようになり、ダンスやフィットネスだけでなく、学校での演劇やミュージカルなどの制作にも関わり、様々な形の表現の楽しさを伝えていきました。

団体を設立し10年を過ぎた頃から、指導の仕事と並行して、インストラクターメンバーたちと一緒にダンスカンパニーを立ち上げ、自分たちの伝えたい想いを独自の作品に仕上げ公演活動を行うようになりました。制作過程では作品のコンセプトに対するメンバー全員の共通の理解や表現方法の検討に膨大な時間を費やしなから、日本人としてのアイデンティティを意識した作品創りにも没頭していったのです。

そんな中、次第に「豊かさ」について考える

ようになり、なにかが足りない、何か満たされないといった感覚が自分の中に芽生えてきていたのですが、仲間と共に作品を創造し、そのための時間を共有して、それぞれが自己の内面を深く掘り下げる創作活動を行っていく過程で、以前の焦燥感や不足感から安定感、充足感に変わっていったのです。

りらのコンセプト1 ~創作が教育の中心~ 1、「創作活動」について

何かを創りあげる過程は、最初に「何かを創りたい、してみたい」という気持ちと「ひらめき」というワクワクする感覚から始まり、その後は「具体的に動く」が続いていきます。しかしZEROから形のあるものへ「創造していく」ということは、実は地道な作業の積み重ねであって大変時間や手間がかかり、試行錯誤、やり直し、繰り返しの中から搾り出すように生まれて来ることが多いです。

途中、暗くて長いトンネルに入り込んだような気分になったり迷路の中に迷い込んだような気持ちになり、最初のあのヒラメキはどこへいったのかと思ってしまう、ワクワクしていた高揚感も遠のき、心身ともに疲れ果て投げ出してしまいたくなることさえあります。

しかしどん底を這いずり回りながらも、止まらず試行錯誤を繰り返していると、不思議なことに突然小さな光が見えてきて、人により多少の違いはあるものの、誰もが必ず通る道であることを知り、その扉の向こうにあるものを知ります。それは、必ずしも他人からの評価ではなく、自分の中での納得感であり、確信であり、それらのことを成し遂げることにより自分に対する自信に繋がり、次なる一步を踏み出す大きなエネルギーとなるものです。

創作は苦しい。しかしそれを乗り越えたところに成長があり、そこまで到達しないと得ることができない、目には見えないけれど大きな宝であると思っています。

私自身舞台創作を通して、苦しみ、悩んだ末

にその宝を見せてもらい、また次も見たいと思う気持ちが、次なる挑戦に進めたのだと思っています。

2、仲間と共に味わう充実感・共感・絆

そのように、自分自身が学んだ、表現の楽しさ、創作の魅力を、多くの人に知ってもらいたい、子供たちがそれらを通して学び、成長につなげていってほしい、その思いから様々な場所や形で伝えてきました。

そして、私自身もその制作過程に関わることで、彼らが多くの「感動」を体験し、成長し、大きく変わっていく姿を見せてもらったのです。

・必ず起こってくる問題

ただ、人が一人ではなく、集まって一緒に何かを作るとなると、実はそんなにスムーズには進まず、必ず次々と問題が起こってきます。最初のヒラメキを共有した時点では楽しくていいのですが、動き出すとなかなかそう簡単にはいきません。人と関わり、ましてや一緒に長い時間を過ごし、共同のものを作り上げていくということは大変面倒で、他の人との意見の衝突は避けられないものとなります。

プロの集団でも色々な問題が起こりますが、それが生徒、子供となると、意見の食い違い、モチベーションの違い、技術レベルの違いなどの様々な問題が次から次へと起きてきます。しかし本番の日程は決まっている。幕は開く。例えどんなに人間関係で揉めようとも、何か解決策を考えなければいけないなかで、焦りが全員に広がります。嫌でも話し合うしかない。その中から折り合いを付け、全員が納得する解決策を見だし、又一緒に取り組む。それを繰り返して、舞台当日まで、でこぼこしながら、団子のように練りながら、息も絶え絶えで持っていく。生徒の場合はどうするか。寄り添い、水をのませ、アメを食べさせ、励まし、助け上げ、時々怒り、引きずってでも、舞台当日のゴールへ連れて行く。

舞台創作が教育としても有効であるのは、なによりその積み重ねがあるからだと考えています。

・感動体験

そうして迎える舞台当日。この日は今までの集大成の発表の日、だからお祭りです。私は「おめでとうと感謝の日」と呼んでいます。

舞台当日は、緊張と興奮で舞台裏はドラマです。同じ出し物でも、自分が出演していなくても、私自身何度も緊張し身が引き締まる思いを味わってきました。舞台袖では、大人も子供も誰もが同じ光景を見せてくれます。緊張の波動が連鎖し、ピリピリした空気が漂います。緊張で袖の幕を握りしめる姿。人という字を書いて何度も飲み込んでいる姿。緊張のあまり泣き出す子。ひたすら踊りまくっている子。みんなでエールを掛け合う姿。じっと舞台を見つめる目。本当にきれいです。そうして舞台へ、光の中へ飛び出していきます。今までの長い長い練習や、辛かった日々の数々、涙した出来事、嬉しかったこと、全てを抱きしめて舞台へ駆けて行く。そしてその瞬間の力を出し切り、汗みどろで袖に帰ってくる。私は何をするか。それを受け止める。抱きしめる。頭をなでる。手を握る。幸せな瞬間です。

舞台が全部終わったあとはどうなるのか。舞台の上から客席への挨拶の時、幕が降りてから舞台の上で泣くのです。自然と涙が溢れてくる。緊張から安堵へ変わっていく瞬間。なぜ涙が出るのか。自然とわき上がってくる。そして誰もが口にする言葉「ありがとう」。他の言葉は見つからない。誰もが抱き合って、ありがとうを繰り返す。

ある大阪府内の高等学校で舞台作品の制作から上演までを指導することがありました。生徒たちは、最初は照れくささがあったりして及び腰ですが、一つ一つの過程を学ぶ中で、芸術作品を創作することの面白さに夢中になるようになり、最後に舞台発表が終わったとき、「今まで指導していただきありがとうございます

た」「今日までの長い時間、見守ってくれてありがとうございました」「送迎してくれてありがとう、ご飯を作ってくれてありがとう」普段恥ずかしくて言えない言葉が出てきます。泣きながら指導者や両親や家族に感謝を伝える姿を見ながら、感謝という気持ちは頭で考えて分かるものではなく、こうして感じるものなんだと教えられます。とことんまで頑張ったからこそ、苦しんだからこそ泣ける。感動でうち震えて泣く。感動は、どれだけ思いを込め打ち込んだか、自分をさらけ出して関わったかに比例する、そう私は思います。それを、その時を何度も経験させてやりたい。それが、私が舞台創作から教えてもらった大切なことだからです。

感動を体験する事で感謝が生まれ、次のステップへ進み成長し進化していく。子どもたちにはそれを経験できる場や機会が必要であり、大人もそんな場が必要であると思います。舞台と一緒に創作するという事は、人が結ばれ絆が深まり、今の社会で問題となっている人間関係の希薄さを解消することにも役立ち、そして教育の根本にもなり得る。そのように考えます。

・舞台は総合芸術、社会の雛形

私が携わってきた舞台芸術というものは「創る」ということにおいての総合芸術であり、多くの人に関わるプロジェクトチームです。実際に舞台上で演じる人、演者のいる舞台の進行を把握する舞台監督、脚本家、演出家、ディレクター、音響、照明、舞台を設営する舞台造形、大道具、小道具、衣装、メイクアップアーティスト、チラシやポスターの制作、広報、資金管理、受付、食事等、数多くの役割分担があります。そのどれかひとつでも進行状況が悪いと、成功は望めません。逆に、それぞれが自分の責務を理解し結集して創り上げたものは、関わった人が多ければ多い程、スケールの大きな仕事となり、参加者それぞれも得るものが多いのです。

このような制作過程を眺めつつ、私は、成功した舞台というものは、まさに「望ましい社会

の雛形」であると思うのです。

・創作活動、過程の重要性

発表当日もさる事ながら、実は当日までのその過程に、隠れた大切な学びが山ほど詰まっていると思っています。

日々の地味な積み重ねの中にも目には見えない大事な学びがあって、それを心の宝の箱の引き出しに詰めていっていると思うのです。舞台や作品を作りあげ、発表するまでの長い時間、その時間をどのように過ごすのか。いかにその時間を学びにできるか。創作の過程には、そのような学びを経験する出来事が山積みで、人間形成の学びの手段としては、素晴らしいツールであると思っています。

「最後まで諦めず乗り越える方法」「他者とすったもんだしながら編み出して行く方法」「自分を奮い立たせる方法」「創意工夫し、道は一つでないことを知る方法」様々な心の動きを経験しながら、自動的に詰まっていくなにより大切な時間。子供たちはそのことに気がつきません。なぜなら毎日こなすことに一生懸命だからです。しかし、いざという時、ここという時に、自分の中から自然に引き出せるものが、「経験から学んだ生きる力」であると思っています。

社会は「生きる力」を子供に身に付けさせるようにと言っていますが、その力をどのようにして付けさせるのか。それは子供たちが人と交わりながら、教科学習と並行して身につけていくことが必要であり、それができるのが一日の大半を人と過ごす学校という場所であり、舞台創作活動は、私から見るととても有効な手段でありツールであると確信しています。

りらのコンセプト2 ~自然の中での教育~

1、和歌山との関わり

「自然の持つ力」と「きのくにの教育」との出会い

今から20数年前になりますが、和歌山県橋本市の山間部に設立された「学校法人きのくに子

どもの村学園」という私立の学校に長男が入学することになりました。体験学習を中心に置いた自由学校で、教育について多くの事を学ばせてもらった学校です。

そのことがきっかけになり、週に1~2度その学校の講師として和歌山に通い、和歌山で過ごす時間が次第に増えて来たことで、和歌山には都会には存在しない、人に与えてくれる、なにか大きなものがあることに気づいたのです。

その大きなものとは、大地が持つエネルギー、そこから収穫出来る食べ物、四季折々の花や生きものとの出会い、季節によって変わる風、香り、川のせせらぎ、山の木々の様子など、自然の持つ力です。時には厳しくも有りますが、人間の心を落ち着かせ、疲れた心を癒し、また人間の持つ五感を冴え渡らせ、感性を豊かにしてくれます。

多くのものが新鮮で、生きたエネルギーが充満しており、人間本来の「生きる」ことの基本になるものがここにはある。また人も自然の一部であり、その中であらゆる生命や地球そのものと共存していく事がとても大切であると感じるようになりました。

都会の中で、舞台を通してたくさんの感動を演出してきた私ですが、自然の持つ素材そのものの力に感動し、それがそのまま残っている和歌山という風土に、大きな魅力を感じるようになっていったのです。

芸術活動全般を専門教科として深い内容で指導しながら一般の科目もバランス良く指導することのできる高等学校を自分自身で運営し、若者たちを育てたいという強い想いを持つようになって来ていたので、そのような学校を創るなら、都会ではなく、自然のもつパワーが満ちあふれた和歌山県で創りたい。その豊かな自然の中で仲間と共に長年培ってきた舞台芸術や創作活動により、感動を経験させながら、自己決定と自己責任がしっかり身についた子供たちに育てて行きたいと考えるようになりました。

「りら」のコンセプト3

~人と人とのつながりの大切さ

そしてもう一つ「りら」の教育コンセプトとして外せないものがあります。それは、現在は核家族化が進み、年配の方と接する機会はほとんどありません。しかし人は本来一人では生きられず、必ず誰かの世話になり、また誰かの手伝いをして、共に協力、共存していくものと考えます。

残念ながら現代の子供は同世代の横の繋がりだけで結びつくことが多く、限定された環境の中で一人でも生きていける、他人と深く関わらなくても十分毎日を過ごすことが出来ると思っような見受けられます。しかし社会に出ればそうはいきません。人と人が協力し合いながら、それぞれの役割を果たさなければより良い社会は成立しません。その中で、人々がそれぞれの特徴を充分発揮し、全員でひとつの目的に向かうプロジェクトチームとして取り組むことができれば、望ましい社会が実現するのだと思います。

そのような考えで見てみると、理想的に考えれば、学校は生徒たちが出来るだけ多くの人たちと関わりながら人間関係を学ぶ場所であり、地域は生活を通して縦の社会のあり方やコミュニティの必要性を教えてくれる所であることに思いあたります。

・地域の学校

今現在の「りら」では、教育活動にとどまらず、地元住民の方々や芸術や教育、地域活性化に関わる多くの方々が頻繁に出入りし共にいろいろな活動を展開しています。地元の方々からは、「地元の学校」と思っただけのようになり、「りら」もやっと土地に根付いてきたなと思えるようになりました。

しかしながら、開校のための手続きを始めた頃は、地元地域にはなかなか受け入れてもらえませんでした。

説明会を何度も開いたのですが、「こんな静

かな山里に、事件が起こっては困る。単車で走り回ったり、色々な問題が起こるかもしれないのなら、このまま静かに暮らしたい」そのような声も多くあり、また「この学校は私立や、公立は地域のものだけど、私立に応援は出来ない」という声もありました。

当初、そんな雰囲気は支配的でしたが、そんな中でも「学校は地域にとって大事、今時こんな大変な時代に学校を作るという変わり者がある、次の世代の為に頑張るといっているのだから応援しましょう」「学校の時計が止まったままだったのが動き出した。町に活気が戻る。うれしい」と言ってくださる方も大勢いてくれたのです。

そのような過程を経て、平成19年4月1日、和歌山県海草郡紀美野町真国宮、高野山の麓、過疎化と高齢化が進んだ山里で廃校になった小学校をお借りし、地域の人たちの協力をいただいて、芸術を教育の中心に置き感動を体験することで「生きる底力」を身に付ける学校「学校法人りら創造芸術学園＝りら創造芸術高等専修学校」が和歌山県の認可を受け、学校法人きのくに子どもの村学園学園長 堀真一郎先生の多大なお力添えの元、開校致しました。

・「りら」に対する地域の考え方の変化 ～結びつきの輪が広がる

次に私たちは、神社の掃除を寮の生徒が引き受けたり、生徒たちが、自分たちの行事の案内を持って地域の方々を一軒一軒回ったり、より距離を近づける努力をしました。そうして次第に地域の方が学校に来られることが多くなり、話す機会も増えていきました。

そんなある時、600年前から続いていたのが、途絶えかけていた地域の伝統芸能「真国御田春鍬規式」の復活を依頼されました。難しい古語の文が並んだ古典芸能で、生徒達は英語より難しいと、悪戦苦闘して取り組みましたが、長老たちから口伝による指導を受けながら、練習を重ね無事復活し発表出来たときには、地域の方

たちはとても喜んでくださいました。毎年旧暦の1月7日に神社で奉納するこの伝統芸能は、1期生の卒業研究で復活し、現在の7期生まで研究と神社奉納、舞台発表が受け継がれ、学校全体の大切な行事となっており、さらなる研究に取り組んでいます。

そのような中で、次には「りら」が世界民族祭という「世界中の人が和歌山の山里に集まって世界を芸術、文化で一つに繋ごう、つながろう、争いのない世界をここから作り始めたい。日本の原風景が残っているこの山里に世界の人々が参集する場を創りたい」という趣旨の手作りのお祭りを始めました。やがて、地域の方々や協力者の方たちが加わり、学校の教育活動にとどまらず、地域おこしの一環として一緒に開催することになり、昨年10月には年1回のお祭りが第5回目を開催するまでになりました。

このときは県知事もお見えになり、皆さんにお声をかけてくださり、地域の人たちはとても喜ばれました。町や県が、小さな地域の行事を応援してくださることは、地域興しを頑張っている人たちにとってとても大きな励みとなります。

そうして、どんどん輪が広がり、繋がりが深くなり、村の祭りでも御神輿を生徒が担ぐお手伝いをし、また隣の地域の獅子舞も生徒が手伝うようになりました。次第に地域の人たちの「りら」に対する意識が変化していき、今では「この学校は地域の学校や、私立も公立も関係ない。みんなこれからの日本を担う子供たちや」といって、優しく見守ってくれています。

生徒たちは、そんな関わりから本当に多くの事を学んでいると思います。

ある大阪出身の生徒が「僕はここから大阪に帰るまでの間多くの人と出会う。しかし、挨拶は全くしない。なのにここでは寮から学校まで数分の距離でも、出会うと必ず挨拶を交わし、話しかけてくださる。僕が問題を起こすと、地域の方は悲しむだろう。だから気をつけないと」と話していました。顔が見える距離の間柄が、

人を優しくさせ、気遣いの出来る人を育てるのだとつくづく思います。

私は、お年寄りの持つ、知識だけではない生きてきた知恵を子供たちに伝えてもらいたいと思っています。それは人と人との関わりあいの中から学び、次の世代に伝承していくものだと思います。この和歌山で、子供たちに縦のつながりを経験させてやりたい。そして私自身、それを繋ぐ役目になりたい。

学校のある「真国」というところは、大勢のお年寄りが元気で暮らしておられる。その場所で、生徒たちは成長の過程を過ごす中で自分自身の内面と深く向き合いながら、人生の先輩である目上の人をリスペクトし、その人の経験からくる深い知恵を学んで欲しいと願っています。

これからの「りら」 ～過疎から世界へ

1、文化・教育活動による国際交流

「世界民族祭」のことについては前述のとおりですが、「りら」を起ち上げた動機のひとつに、世界の人々と文化・教育で結びあいたいという想いがありました。

それは学校開校以前に経験したことです。外国の人たちが、長い年月の間世代を超えて継承してきた自国の伝統や文化を誇りに思い、どれほど大切にしているかを聞かせてもらうことが多くあり、その時につくづく自分が自国、日本のことを知らないことを思い知らされ、そのように感じている人たちを本当に羨ましく思ったのです。

ダンスカンパニーのメンバーと一緒に外国で公演をした時も、次に外国で発表するときは自分の生まれ育った国の文化、精神性をテーマにした作品を創って持っていきたい。子供たちが海外に行くときに、自分の国のことを理解し、日本をテーマに作品の発表をさせてやりたい。そう強く思いました。そのことの経験から、世界の人と文化で交わるには、当然ながら、自分の国日本の文化をよく理解しそれを伝えることが必要であると気づかされたのです。日本に帰

ってからは、日本文化を深く理解するための勉強に精を出し、カンパニーではストーリーからそれを盛り込んでオリジナル作品を創作してきました。

「りら」を開校してからも、生徒や指導者、関係者がこのコンセプトで海外に渡り、海外の舞台上で日本の伝統芸能や日本的なもの＝オリジナル作品を発表すると共に芸術系高等学校などと交流を重ねてきました。その交流の際、外国の方たちからは、必ず日本文化のすばらしさに対し賞賛の言葉をいただきました。そのコンセプトが、地域のお祭りとなった「世界民族祭」にも生きています。住民400人の郷に延べ4,000人を超える人たちが集う。残念ながら、何故か毎年雨が降る。昨年は特にひどく土砂降りであったにもかかわらず、この郷に何かを感じてくれている人たちが、黙々と参集してきてくれて本当に楽しんで帰って行ってくれました。

このような世界につながる文化・芸術活動を、日本の原風景が残っている和歌山のこの地域において、今後もさらに拡大し、海外からの来訪者ももっと来ていただき、日本の文化や伝統の数々を知っていただきたい。そのことにより、観光面も含め地域もどんどん活性化していただきたいと期待しています。

これからの「りら」

2、大きなフィールドでの教育研究と社会貢献

和歌山国体が迫ってきました。ご縁があって国体のテーマ曲「明日へと」にダンスを振り付けすることになりました。このようなかたちで、和歌山にご恩返しができるのかと、大変ありがたい気持ちになり一生懸命制作させていただき、その後も普及活動のお手伝いをさせていただいています。折しも、新しい学習指導要領では中学校や高等学校の正課体育授業にダンスを取り入れることとなり、長年ダンスに関わってきた者としてやっとその時代が来たのかと万感の思いです。その昔、大阪で学校授業にダンスを取り入れることを発議し、何とかそれを実現

させようと働きかけをするなかで、その有効性が理解されず悔しい思いをしたことが思い出されたのですが、時代は大きく変化して行っていることを感じています。

それから、またまたご縁があり、和歌山県教育委員会から、それら授業のための教材としてのダンス製作の依頼があり、お受けすることになりました。小学校から中学、高校までのエクササイズ・ダンスについて、小学校はオリンピックで活躍された体操選手の田中理恵さん、中学校と高等学校は私が監修して制作しました。すでに教材は制作の最終段階にあって並行して普及事業に入ってきております。

今後もこのように、私どもの教育活動が何らかの形で社会の、和歌山のお役に立てればありがたいことだと思っています。そして私どもに限らず、多くの教育コンテンツがラボの中での単なる研究ではなく、社会の中で実際に役立つ生きたコンテンツになっていただければこの上なく嬉しいことです。

これからの「りら」

3、～地域の活性化につながる新たなコミュニティ・プラットホームの構築

「世界民族祭」に端を発して人々の輪が広がりました。最初は、運営面のほとんどを学校が担って実施していましたが、協力者が増え、地域の方々が実行委員会の中心となって運営するようになりました。そうすると、ご自分たちの手で創りあげることの手応えの中で、さらなる地域興しも起こってきたのです。

過疎化対策事業を「文化・芸術によるまちおこし」により行うことが話し合われ県からの補助をいただいて文化ホールやイタリアンレストランの整備を行いました。ハード面には行政の支えをいただき地域の方々が中心で整備し、ソフトとしての文化は学校を中心とする芸術家や教育関係者、行政機関の関係者たちがアイデアを重ねて担う図式が始まったのです。

学校が受け皿となり、なにかにつけていろいろ

んな夢を持った人たちが集まってくるようになり、さながらルネッサンスの雰囲気でもカテゴリーを超えて話し合っています。思想や立場にとられなくてもいい環境、学校はこのことにうってつけの場所であり「りら」が開かれた学校であり続けることが大切だと思っています。

そしてさらに、卒業生や保護者の方たちもこの集まりに参加します。「りら」から社会に巣立った若者も、折々「りら航空母艦」に戻り再びチャージして発艦していきます。

住民主体のコミュニティ・プラットフォームが地域活性化に必要であり、それを構築しなければならないことは従来から行政主導で言われてきたことですが、その枠組みを少し柔軟に考え、従来のコンテンツである自治会などの団体とともに学校もそのプラットフォームになり得ること、地域の枠を物理的な一定の範囲に限定しないことの発想をみんなで共有していきたいと考えているところです。

アイデアは無限に広がり、大人もワクワクしながら、教育と地域づくりと一緒に進めていきたいと願っています。

ふるさと和歌山を愛する若い世代を育てる為に最後になりましたが、私はここ和歌山に来させていただき、本当に良かったと思っています。

日本の国が大切にしてきたもの「つながること、結ばれること」の大切さ、そして「自然と共に生きること」の原点がここにはあると思います。

私は、学校の校長として地域の人と共に、この自然豊かな故郷和歌山県紀美野町真国というところで、学校、地域、保護者、応援して下さる人達と一緒に何かを発動させ、発信し、縦と横のつながりをしっかり結びながら、これからの日本を担う大きな役割を持った子供たちを、芸術活動を通して育み、社会に送り出していきたいと思っています。そして、そのことに一緒に取り組んでくださる仲間の方たちの輪が一層広がることを願ってやみません。